文化祭作品展

11月15日～23日　ゆめあるて

とよおか

第 718 号
発行人●豊丘村公民館
館長　市澤和宏
編集人●長野県下伊那郡
豊丘村公民館報
編集委員会
0265－35－9066
印刷所●龍共印刷株式会社

私たちの村
（12月1日現在 ※外国人を含む）

男	3，337人
女	3，378人
総人口	6，715人
世帯数	2，197戸

コロナ禍により
規模を縮小して開催

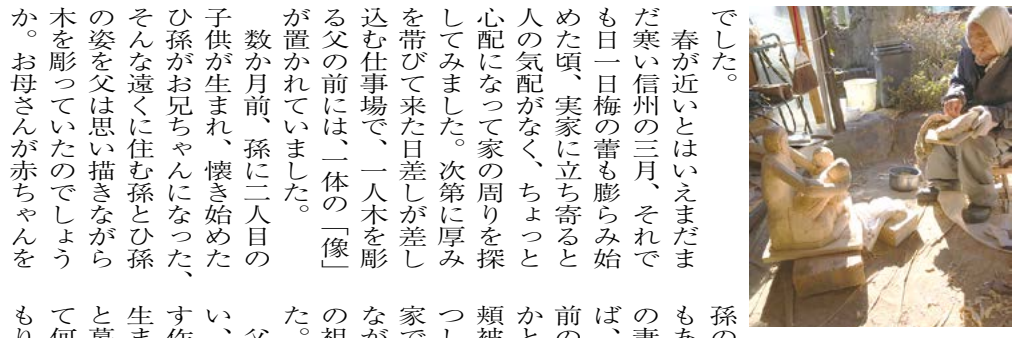
コロナ禍で様々な活動が自粛・停滞している今年ですが、公民館では、文化祭作品展の開催について各グループ等へアンケートを行った結果、開催を決定いたしました。今年は、二十五の団体・個人の方々より出展があり、展示期間中、約四百名の皆様にご来場いただきました。

今回は、木彫を出展された堀越出身（飯田市在住）の久保田省市さんの娘さんとご本人の文を紹介します。

木彫の展示を終えて思うこと

宮島順子

本年度の豊丘村文化祭作品展で木彫を展示させていただいた際、本人紹介に使わせていただいたこの写真を撮ったのは、昨年の初春、父が九十四歳になる少し前でした。



春が近いとはいえまだまだ寒い信州の三月、それでも日一日梅の蕾も膨らみ始めた頃、実家に立ち寄ると人の気配がなく、ちょっと心配になって家の周りを探してみました。次第に厚みを帯びて来た日差しが差し込む仕事場で、一人木を彫る父の前には、一体の「像」が置かれていました。

数か月前、孫に二人目の子供が生まれ、懐き始めたひ孫がお兄ちゃんになった、そんな遠くに住む孫とひ孫の姿を父は思い描きながら木を彫っていたのでしょうか。お母さんが赤ちゃんを抱き、その足元から爪先立って赤ちゃんを覗き込んでいるお兄ちゃんを、母の眼差しが暖かく包み込んでいる「母子像」でした。

それは、父の孫とひ孫の姿かと思えば、そうでもあり、六十年前の父自身の妻と子供らの姿かと思えば、そうでもあり、九十年前の父の幼い頃の母の印象かと思えばその様にも見え、頬被りをした父の姿は、いつしか父の故郷堀越の山の家で、囲炉裏に薪を焼べながら縄を編んでいた私の祖父の姿と重なりました。

父が大きな丸太に向かい、その丸太から姿を現す作品一つ一つからは、生まれ育った豊丘の自然と暮らしの厳しさ、そして何より故郷の人々の温もりが感じられ、そこに時代を越えた「郷愁」が伝わって来るのです。

宮島　順子

『この度は出身地の文化祭に於いて作品を展示させていただき、私の拙い作品を見ていただく事ができ、令和二年の心に残る思い出になりました。「故郷は遠くに在りて思うもの」と言われていますが、今回皆様の暖かな心情と身近に接することができ、感慨無量の一言です。』

久保田　省市

段丘

人はよい記憶よりも、悪い記憶が残りやすいという。『少女ポリアンナ物語』のポリアンナは、毎日いいこと探しをしていた。見習って目を見開いてこの一年のいいことを探してみた。

マスクのおかげで、ファンデーションの減りが遅くなった。なんて経済的。マスクのおかげで、今年は喘息の発作が減った。湿った空気を吸っているからだそうだ。

自粛のおかげで少し断捨離をした。少し片付いた。自粛のおかげで、体を動かす大切さに気付いた。常にエコモードで暮らす私が、毎日歩くようになり、家の中でも子どもとドタドタとダンスもどきをするようになった。自粛のおかげで自分の心の持ちようについて考えた。もやもやとした息苦しさを吹っ飛ばす為に、さまざまな方法を試した。おかげで日常のささいなストレスに対しても対応できるようになった。

パソコンやインターネットを使っての仕事が増えた。私の苦手分野である。「窮鼠猫を噛む」とはこのことで人は追い詰められればなんとかやれる。パソコンにはまだ私の歯形はついていないが、時代の波にしがみつけたかも。

食事のテイクアウトが増え、いろんな店の味を試すことができた。この時出合ったおいしいものはたくさんある。この一年にもいいことはあったのだ。

（小池淳子）

公民館登録グループ活動紹介 第23回

歩く替わりにマレットゴルフ

アカシアマレットクラブ　会長　久保田胤雄

今年四月よりアカシアマレットクラブの会長になりました久保田胤雄です。令和二年は年始めから流行りだした新型コロナウイルス感染症で毎月二回開催するはずだった例会も幾度も自粛対策で中止となり、五月開催予定の郡体協のマレットゴルフもコロナで中止となりました。六月から梅雨の季節、長雨の末に八月には七個の台風が発生し天竜川の水位が上昇して十九番ホールと二十番ホールが完全に流失してしまいました。流れた二ホールに替わるホールの作り替え（新設）場所を役員他関係者で検討し、測量から見取図を作成、公民館ゆめあるてを経て国交省の許可を得て九月二日業者によるマレット場新設の復旧工事が始まり約一週間閉鎖されました。再開は九月十日過ぎになりましたが大工事にて豊丘村公民館、マレットクラブの全会員の皆様には多大なご協力・ご支援を賜り心から感謝申し上げます。九月二十三日から月例会も開催できてリニューアルした五番・六番ホールで皆さんが「きれいになった！よく早くコースを作ってくれて嬉しい！」など好意見を聞いて安心しています。全員参加の清掃作業も大会当日にやる事に決めましたし前会長さんのお骨折りもあってかなり改善されました。

アカシアマレットクラブは現在三十七名で内、男子二十八名女子九名で月例会や大会に向けて朝夕に多くの方々が練習に励んでおられます。マレットゴルフは公民館活動の一環で、会員相互の親睦を図り、健康増進にも役立ち、私など大きな病気をして退院後に「なにかスポーツをしなくちゃ！」と親しくお付合いしていた先輩の勧めもありマレットゴルフを始めました。マレット場はアカシア以外に中芝の天竜川河川敷の中に「水辺マレット場」が有り、会員三十名にて日々楽しんでいます。マレットゴルフは上手いに越した事はありませんが、春、そよ風の中でマレット、夏は日陰を求めてマレット、秋は赤とんぼと一緒にマレット。どうぞ皆さん健康維持のために私達と一緒にマレットゴルフをやりませんか。お待ちしてます。

郡体協マレットゴルフ大会（10月31日）

虻川下流域三六災害体験談（19）

虻川の砂防堰堤は、下流への土砂流出を止められるのか？ その２

原　章（古畑）

☆**現在の虻川では、全ての堰堤が満砂状態**☆

四年程前に飯田建設事務所に問い合わせたときに、昭和三十二年から平成二十年までに虻川本流に建設された砂防堰堤は、全部で七基と回答がありました。最後の七番目に建設され、前回取り上げた日向山砂防堰堤だけが、当時はまだ満砂ではなかったのですが、前回書きましたように現在は満砂状態（写真）です。これからは、上流からの土砂を虻川の全ての砂防堰堤で止めることはできません。

☆**砂防堰堤は簡単に設置できない**☆

日向山砂防堰堤の規模のものは、設置するのに約十億円くらいはかかるそうです。飯田建設事務所管内には、砂防・防災施設建設や維持管理の必要な箇所は数多く、虻川へ更に砂防堰堤を造って欲しいと要望しても、そう簡単に取りかかれるものではないというお話でした。土砂の浚渫も簡単ではないと思います。

九州豪雨を受けて熊本県では球磨川支流の川辺川ダムの計画を見直す動きがありますが、大金がかかりますし、堰堤とかダムに頼れば全てがうまくいくとは言い切れないと思います。

この地域でも、これから三六災のような豪雨災害が起これば、虻川下流に大量の土砂がそのまま流れてくることを覚悟しないといけなくなりました。私たちはどう対処すべきなのでしょうか？

（続く）

前回の図に誤りがありましたので、訂正願います。

誤（305ｍ）を正（350ｍ）へ

日向山砂防堰堤（本年11月27日）

シリーズ「元気な高齢者」74

陽気な性格　幸を呼び込んだGS経営

大澤藤一さん　九十歳　小園在住

昭和五年に現在地近くで、四人きょうだい（男三、女一）の長男として生まれた。ただ長女は不幸にも地域の流行病のため幼児期に亡くなった。父親は神主を務めつつ主に養蚕と農業をしていた。喬木の竜東農蚕学校を卒業、農業を継いだが藤一さんはもともと農業にそれほど愛着が無く、機械いじりが好きであった。皆が牛で田を耕す時代に、村内で三番目となる耕耘機を借金して購入し、自らの土地を始め近隣家の田も頼まれて耕した。お陰で二年で借金は返済できた。この時の、燃料を頻繁に購入した石油会社との縁が、その後の人生に大きく影響することになった。燃料を扱う仕事の将来性を確信したのだ。

二十八歳の時、先方から請われて飯田市の『輸入石油』に入社した。ここには四年間ほど在籍したが、新規開店を計画して社員を募集していた同業のＩ社へ移った。既に危険物取扱主任者の資格を取得していたため、新規開店する営業所で直ぐに所長待遇で働いた。その時、開店の式典で若い藤一さんが挨拶し来賓者を驚かせた。Ｉ社には約二十年間勤め、その間に石油業のノウハウを一から十まで修得した。やがて業務独立を考えるようになり、ちょうどその頃地元の小園でガソリンスタンドを営業していたものの経営の情熱が薄れ、譲渡先を探していた人との思惑が一致し、話はトントン拍子に進み、『大東石油』と命名し独立した。時に五十三歳であった。

拡大しつつあった伴野工業団地の人々を中心に、顧客に恵まれ予想以上に繁盛した。本当に良いタイミングであった。雇い人だけでは回らなくなってきたので、当時東京で働いていた長男を呼び寄せ一緒に経営に当たることにした。極めて順調に進捗し、あまりの好業績に、付き合いのあった金融機関からも驚きの目で見られた。特別なことを行ったわけでは無く、大きな声できちんと挨拶し顧客対応をテキパキとするという基本的なことを行った結果と思っている。

しかしそんな好状況も最近の世間情勢には勝てない。ハイブリッド車の普及によるガソリン消費量の減少および法改正（ガソリン貯蔵タンク構造の改善）による設備投資の負担増のダブルパンチである。三十年以上営業してきたが撤退への踏ん切りが付き六年前にキッパリと止めた。未練が無いと言えば嘘になるが、大きな決断であった。

商工会には独立した当時から入り、三十年間所属し内十数年は理事として活躍した。その頃に海外はハワイ、台湾、韓国を、国内はほとんどの都道府県を旅行した。若い頃はドライブが好きで良く遠出した。しかし九十歳を過ぎた現在は周りの勧めもあり免許を返納しようと考えている。他に趣味と言えるものはなくマレットゴルフを少々と、中南信の温泉巡り位である。

一昨年に動脈瘤炎症で一ケ月入院したが、幸いにも現在は回復し後遺症も無い。十年前にパンク修理中にタイヤが破裂した際の爆風で耳に損傷を負った影響で難聴となったが、それ以外は足腰も強く健康で、月一回医者で薬を調合してもらい健康維持に留意している。スタンド業務で、足早な対応及び元気な声かけも効果があったと思っている。

新しい物好きで、ワープロが出だした当時に早速購入し修得に向けて精力的に取り組んだ。アルコールは強くないが、陽気な性格で場を盛り上げ、人に物事を頼まれれば断れない。

二十五歳の時、知人の紹介により高森出身で五歳下の初子さんと結婚した。当時藤一さんは農業の傍ら耕耘機でバリバリと仕事をしていた頃で、初子さんは直ぐに農業、その後の果樹栽培を一手に任されることになり、車の免許を取るなどして期待に応えた。しかし運悪く発見の困難な箇所にできた癌により無念にも三十年前に亡くなった。

東京と近隣にいる二人の弟さんが健在であるのは何かにつけて心強い。現在、息子さんとの二人暮らしであるが、度々遊びに来る娘夫婦や孫夫婦、曾孫たちで賑やかだ。これまでの人生を振り返り、周囲からは苦労と見られることも本人はそうは思わず、楽しい方が多かったかなとにこやかに語られた。

文責　桐崎長一

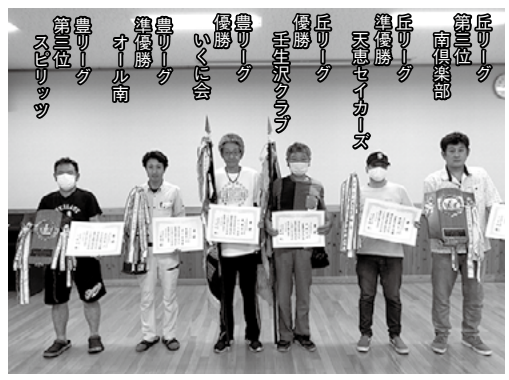
第50回 夜間ソフトボール大会結果

優勝　豊リーグ　いくに会
　　丘リーグ　壬生沢クラブ

今年は記念すべき第五十回の大会でしたが、コロナ禍の影響により例年の半分程度の試合数でリーグ戦を行いました。参加チームは十四チームで、例年どおり豊リーグと丘リーグとに分け、七月下旬から九月上旬にかけて各チーム七試合を戦いました。なお、リーグ戦が終了した段階でトーナメント大会の実施も検討されましたが、開催には至りませんでした。

夜間ソフトボール連盟では来年度において五十周年を記念した何らかの記念事業を実施したいとしています。次年度も一つでも多くのチームが参加されることを期待いたします。

（教育委員会事務局）



竹村定男先生のこと

竹村英雄

河野区民なら誰一人として知らないものはないだろう大宮神社内祖霊社のご神殿は、かつて竹村定男先生が東郷神社として宅地内に造営されたものを、静岡に転住される際に寄進したものである。

その竹村定男先生について、今を去る二十二年前、すなわち昭和三十年六月二十八日の読売新聞静岡版に「アメリカと結ぶ国民外交」という見出しの記事が出た。このことはあまり知られていないのではないかと思うので、そのことを書いてみる。

以下、記事のまま。

バードリッジ大将と亡き竹村さん

〝先生のおかげ〟戦場の教え子が就職できたお礼に、富士山の絵を贈って他界

今を時めく米本土防衛司令官バードリッジ大将に、ふとしたことから自作の絵を送った日本の一老教育家にバ大将から懇切な礼状が届けられたが、これを見ぬうちに病気で他界した。しかしこの裏には日米両国の国民外交を推進する次のような佳話が秘められていた。

この絵の送り主は静岡市安東柳新田竹村定男さん（六十三歳）で、出身地は長野県下伊那郡豊丘村。竹村さんは東京の落合第二小学校などで三十年間も教鞭をとっていた。

終戦直前、竹村さん一家は東京から静岡へ疎開（こ　こはちょっと違うわけで、実際は郷里河野に疎開後、静岡に転住）してきた。約四十年前に出身地・神稲で先生をしていたときの教え子・西野洋吉さん（四八歳、名古屋市東区片端町、米駐留軍民間保安警備隊本部職員）から突然便りがあって、先生の教えを守ったためにどうにか一本立ちで暮らしてゆけますと駐留軍関係職員として勤めるまでのいきさつが細かに記されていた。

それによると、西野さんは日華事変で右手切断の負傷を受け、大東亜戦争中は郷里の下伊那郡満島で米軍捕虜の監督をしていた。ところが恩師の竹村先生から受けた幼かりしころの教えを守って捕虜に対してはできるだけ親切を尽くしたが、この捕虜の中に米軍軍医将校のワインスタイン博士がいた。

終戦後、捕虜は米軍の手によって一斉に保釈されたが、西野さんはこのため失職の運命に立ち至った。ワインスタイン博士をはじめ米軍捕虜たちは捕虜としての抑留生活中に西野さんが親身も及ばぬ世話をしてくれたことに大変感謝し、ワ博士は、とくに「失業して困ったら私の友人のバードリッジという空軍高級将校が名古屋の空軍司令部にいるから尋ねて行って頼みなさい」と、わざわざ添え書きまで書いてくれた。

西野さんは終戦直後の混乱時代でヤミ屋にもなれず家族を抱えて食うため、バ大将を名古屋の司令部に訪ねたのだった。バ大将は博士の添え書きによってただちに日本人警備員として採用、現在に至ったもの。

戦争中に世話をした捕虜のおかげでこうして暮らしてゆけるのも、子供のころの竹村先生のおかげであるというわけだった。

この文面を見て、竹村さんも感激しそれではバ大将に自作の絵を送ろうと西野さんと相談。そのころバ大将はもう極東空軍最高司令官に栄進していた。西野さんは去る五月初めに東京の極東空軍司令部にバ大将を訪ねて、恩師竹村先生が富士山の絵を贈りたいがうけてくれるかと話したところ、喜んでお受けしましょうとの返事だったので、名古屋への帰途、静岡に下車して竹村先生を訪ね、この旨を知らせた。

竹村さんはそれでは精魂傾けた富士山の絵をバ大将とワ博士の二人に贈ろうと意気込んだが、そのころは持病の胃かいようが高じ胃ガンにまでなって余命いくばくもないことがわかった。

それでも竹村さんは約束を果たそうと絵筆をとったが、衰弱して満足なものはついに断念。すでに書けないとあった富士山の絵二枚を、それぞれ二人に贈った（先生は生前、富士山を愛し、何枚も書いては展覧会に出品していた）。

バ大将は最近さらに米本土に栄進し、いま米本国にいるが、このほどバ大将からサイン入りの写真と次のような礼状が届けられたが、竹村さんはすでに今月五日に他界しており、この礼状を見ることができなかった。

礼状の文面「前略、小生ならびに家内はこの絵を贈っていただいたことを大変うれしく存じます。同時にワインスタイン博士も同様に喜ばれるでしょう。（中略）あなたの手紙で極東における米空軍の役割について貴下が述べられた深いご信念を大変あ

令息・和人さんが送ってくれたもので、バ大将、竹村先生、西野さんの三人が写真入りで大きな活字の見出しで紙面をだいぶ使って静岡版のトップ記事として載せられていた。

（豊丘村民話集・第壱輯〈昭和五十二年〉より）

この新聞は竹村先生のご

文責：壬生雅穂

こちら資料館 211

二十三夜塔

十月の「公民館だより」でお知らせしましたが、「村の石造文化財調査」が現在地区ごとに進められています。そこで、本欄でも村内で見られる石仏等について時折紹介していきたいと思います。

第一回の今回は「二十三夜塔」を取り上げてみました。写真は福島神社にあるものですが、武田彦左衛門先生のスケッチを中心に編集された「村の石神と石仏」（昭和四六年村教委発行）には福島をはじめ村内八ケ所の供養塔が載っています。

また、「二十三夜待」について武田先生は次のように説明されています。

『陰暦十月二十三日の夜、この夜月の出るのを待つ。これを二十三夜待ちという。多く婦女子の信仰が多い。この夜は白米などでお白餅をこしらえて月に供え線香を立て月の出るまで、つぎものなどをしながら待つ。』

調べてみると、二十三夜の月は下弦の半月、月の出は、ほぼ夜中の十二時です。

『今夜は夜更かし公認の日。家事から解放されたおかみさん達が集会所に集まって、繕い物でもしながら何憚（はばか）ることなく賑やかにお喋りに興じている……』私はそんな光景をつい想像してしまいました。

「月待」とは神仏を祀り月を拝む信仰的な行事であったのは当然ですが、庶民、特に女性達の憩いの場、ストレス解消の場でもあったに違いありません。

（資料館主任　唐澤武彦）

俳句 短歌

天高し丈伸びのびと石蕗日和り　磯部セツ子
蓮の実は落暉をまとふ閑けさに　田中　静
「元気か」と電話毎日夜半の月　片桐　洋子
野菊晴れ薄紫は亡母の色　森田　恵子
人住まぬ問口を灯し石蕗の花　三島　里子
稲滓火の峡をめぐりて夕せまる　木下　眞水
アルプスの初冠雪に伊那晴るる　松岡　照子
満天星紅葉霧はがれ渓照り出しぬ　宮下　純子
胃カメラのごりと押し入る神の留守　林　恵美子
襟立てて登校の子ら霧の中　丸山　時子
村沈めし紅葉湖今も影のこす　矢島千勢子
忙日の冬陽に凝らす針の穴　池田　美和
方節の歯をきしませて柿を食む　細井　恵子
ようやくに友と和解の菊日和　河手　洋子
手旗揺れ片側通行秋黴雨入　吉川　明子
川涸れや鳴かねば石となる千鳥　北原　昭子

〈とよおか短歌会〉

古希過ぎて文通の友と再会す彼女も夫を亡くしたという　筒井　恵子
蜂屋柿むけば蔀よりもぞもぞと越冬中か七匹の蟻　福澤貴美恵
誕生祝餅を背おいてとことこと歩む曾孫に親族手を打つ　壬生　千春
ハロウィン前コンテナ角に額うつ一週間過ぎ魔女のごとくに　大原眞由美
数多ある石ころ除いて来年の豊作願い玉葱植える　松尾ヒサコ
この春の霜にもあわず市田柿田村の原にたわわに実る　松下　泰見
ひざ痛と腰痛かかえる友笑う「茸の時季はしゃんとするのよ」　北澤　秀子
いち早く艶めく柿は並べられ季節の彩り店で売られる　毛涯百合子
難聴の山の神さま有難し我が転失気も気づかずにゐる　福澤　亀人

川柳

〈豊丘村川柳クラブ豊柳会〉

▼課題「式」　久保ひろし　選

旧式の家電現役守り抜く　原　美風
年重ねサイズ合わない式服が　林　もも子
ゼロ式の戦闘機乗り帰らずに　山本　義彦
近親者のみの淋しい式ばかり　桃沢　健介
軸吟…人生の最後の式は人まかせ

▼課題「品」　互　選

父親の形見に残る大工品　鎌倉美登里
品質で選べばやはり日本製　久保ひろし
絶品と郷土が誇る柿すだれ　西元　峯子

▼自由吟　桃沢健介　選

朝ドラを涙ながらに懐かしむ　市沢　照子
すり寄って政権褒める似非学者　神稲　邪道
大統領往生ぎわの品位無さ　福沢　勝美
軸吟…学問の自由恐れる独裁者

おがくワークショップ『みんなのうた』響け歌声

公民館社会部　副部長　片桐達司

十一月十五日、夏の面影を残す陽だまりに南北の小学生十五名が集まり、ゆめあるてのホールに歌声が響きました。

集まった小学生は村内中心に活躍される三名の講師の先生方のご指導の下、聴き慣れた曲を一生懸命歌いました。始めは、声を出すことにはじらう様子でしたが、講師の先生方によるホール一杯に奏でられるサウンドでだんだん声が出始めました。

これを契機に豊丘の音楽文化が広がっていくことに期待します。

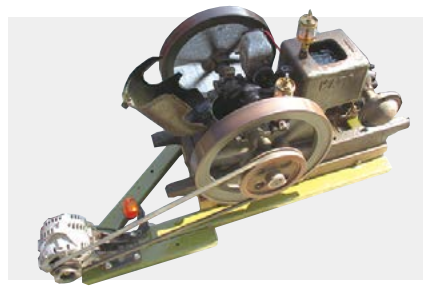
堀越文化祭
手芸、映像、発動機の実演も

第五分館　分館長　林　寿彦

堀越区との共催による文化祭（隔年開催）が十月三十一日・十一月一日の二日間開催されました。今年は特殊な年で開催自体も危ぶまれましたが、夏季スポーツ大会、納涼祭ともに中止せざるを得なかった時よりも多少落ち着きが見られていたこともあり、区・分館役員と協議し三密回避、感染対策の徹底、来場者の把握などを行い実施いたしました。通常は一日間で展示会、各種ステージ発表、ビンゴ大会、抽選会などを大勢の人が和気藹々とした雰囲気の中で楽しむのですが、今回は展示会とスタッフのみで行う抽選会に絞り、会場も分散、期間を二日間にして行いました。

展示会では、多くの分館登録グループや子供から大人まで個人の出展がありました。今年を象徴する色とりどりの手作りマスク、防災ブレスレット、手作りポーチなど自治会婦人会の皆さんの丁寧に作られた作品や、スズメバチバスターズの「巨大オオスズメバチの巣捕獲記録」が大画面で迫力満点に上映され、それぞれの活動の一端を来場された多くの人が知ることができました。個人の出展では手作り人形、テラリウム、写真、短歌、絵画・工芸品など多くの力作・大作を出展いただき、まさに芸術の秋で時間を忘れて見入ってしまうものばかりでした。そして最終日には昭和初期の貴重な発動機が出展され、実際に稼働実演していただきました。タン・タン・タン……と心地よく聞こえる発動機の音と共に、生まれる前の昭和時代の農作業の様子について聞かせていただくことができました。

コロナ禍で文化祭への人出を心配しましたが、幸いにも前回以上の方にご来場いただきました。これから冷え込みが厳しくなり予断を許さない状況になると思いますが、新しい生活様式に基づいた分館活動を皆で知恵を出し合い、行っていけたらと思います。



～シリーズ～ No.203 豊丘の自然

オオモミジ
（ムクロジ科カエデ属）

なんと読むのでしょう。①紅葉　②紅葉狩り　③カエデの紅葉。答えは最後に。

昭和二十八年に始まった「生物季節観測」が来年一月から大幅に縮小される。季節の変化を知るすべが極端に減りそうです。ウグイス・アブラゼミなどの初鳴き、ツバメ・ホタル・キアゲハなどの初見全てが廃止。かろうじて残る植物も二十六種から六種（アジサイ・イチョウ・梅・カエデ・桜・ススキ）だけに。

そんな中のひとつ、オオモミジが今月の主役。カエデ属の多くが種名にカエデと付く。モミジと付くのは本種を含めてもわずか。それでいて、〝紅葉狩り〟と言うのだから、おもしろい。

答えは①こうよう、もみじ、②もみじ　③こうよう

（山田　拓）

北の大地にあこがれて
～ユールの挨拶はグッユール～

津田　孝平　#10

十二月ということで、クリスマスの話をしたいと思う。北欧のクリスマスは「ユール」といい、元々は冬至祭だった。冬至は極夜の時期で一日中、日が昇らない。その寂しさを乗り越えるために、お祭りを開き、焚き木を燃やし、美味しい食事をとり、皆で過ごす習慣だった。それがキリスト教の文化と習合し、キリスト教的なクリスマスを祝うようになった。それは北極圏に暮らすサーミも例外ではない。今回は北極圏流クリスマス、ユールを紹介したい。

ユールが近づいてくると、家にツリーの用意を始める。すると大人も子どもも関係なく、仲の良い友人たちが家のツリーの下にプレゼントを置いていってくれる。ユールが近づくにつれ各家庭のツリーの下がワクワクと共にプレゼントであふれていく。そして迎えた二十四日の朝、なんとユールニッセン（サンタクロース）からのプレゼントが靴下の中に届いている。二十五日の朝ではなく二十四日の朝にはプレゼントが届いているのが北極圏流。子ども達はそれを開けて、ひと盛り上がりした後、いつもとは違った雰囲気のもと、魚と玉ねぎの酢漬けを中心とした朝食を食べる。午前中はのんびりとリビングでクリスマス番組を見て過ごす。なぜかは分からないが、外国で制作されたシンデレラの映画が毎年流れている。この映画は変わった映画で、全編同じ男性がノルウェー語の吹き替えをしている。何とも不思議な映画だった。それからお昼を回り、リースグルットと呼ばれるノルウェーの伝統料理を食べる。リースグルットはお米を牛乳で炊き、シナモンとバター、砂糖で味付けをするシンプルな料理なのだが、鍋の中に一つナッツを入れ、食事中そのナッツを引いた人はお菓子などのプレゼントがもらえる。子ども達が楽しみにしているユールの行事だ。このナッツ探しには一つ約束があり、見つけてもすぐに言ってはいけない。みんなが食べ終わり、鍋が空になってから、声高らかに自分の皿に入っていたことを宣言することになっている。大体の家庭では上手く操作がされていて、子どものリースグルットの中に上手く入るようになっているようだ。

夕方になり、教会で賛美歌を歌ったり、お祈りをしたりしたのち、教会の横にあるお墓へと向かう。先祖の墓を掃除し、祈り、感謝を伝える。どうやらお盆行事も兼ねているようだった。教会から家に帰れば、美味しい匂いを漂わせてユールのディナーが待っている。トナカイやサーモン、グラタンに添え野菜、デザートもあり、それはそれは豪華な夕食を食べる。

お腹がパンパンになるまで食べた二十一時、お世話になっていた家族の末娘、リータが皆に席に集まるように声をかける。待ちに待ったツリー下のプレゼントの開封式が始まる。各々もらったものを一斉に開けるのではなく、まさかのリータが一つ一つを宛名と贈り主を発表し、もらった本人が開けていく。プレゼントの山がなくなるまで開封していき、終了時間はなんと十二時。三時間に及ぶ、長丁場だった。そうこうしてユール前日は過ぎていった。当日はと言うと、前日にすべてをやり終えた僕らは、何もせず、だらだらと過ごしたのだった。

たくさんの集まったプレゼントの宛名を確認するリータ

歌は世につれ～ 八話

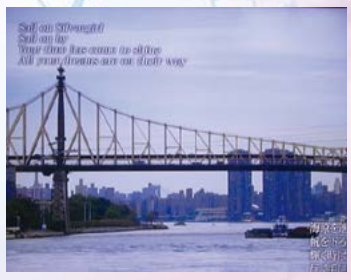
たら・ればの人生応援歌
「明日に架ける橋」

上佐原　小池　光好

今年二月、ヨーロッパスキーツアーの帰りの飛行機で、サイモン&ガーファンクルの「明日に架ける橋」を聴いた。前から好きな歌だったので、繰り返し何度も聴いた。その時ふと思った。あの時この歌を耳にしていたら、人生の応援歌になっていただろうと。

皆さんには、これだ！という人生の応援歌は有りますか？　実は私には有りません。決して順風満帆だった訳ではない。失敗や挫折をした時に、背中を押してくれる応援歌に巡り会えていなかっただけである。

平成二十六年定年退職直前の二月、私は人生最大の絶望感を味わった。友人二人と参加したヨーロッパスキーツアーで、右足股関節を脱臼したのである。ガイドが付かない最終日、これで最後という帰り際に悲劇は起きた。午前とは全く異なる新雪の雪質（クラスト状に変化）を見誤った末の、慢心が招いた出来事だった。ヘリコプターで病院に運ばれ、手術を受けた。即入院。一人異国に残された。後悔とともに癖にならないか（肩は癖になる）、再びスキーはできるのかといった不安と焦燥感に襲われた。六日後自宅まで車椅子で帰国した。帰りの飛行機では放心状態で、音楽を聴くどころではなかった。



♪（和訳）荒海に架ける橋のように　僕はこの身を横たえよう（三番は、君の心を和らげよう）♪「明日に架ける橋」は、「どんなに辛い時も僕は君の味方」と歌い、献身的な励ましの歌として世界中に感銘を与えた名曲である。

友人二人には迷惑をかけたが、励まし力付けてくれた。人は一人では生きていけない。人と交わり、社会と繋がって生きている。人生は後悔の連続だ。失敗して挫折して落ち込んだ時、支えてくれるのは人であり歌である。応援歌は勇気と希望を与えてくれる。たら・ればでも変わりない。